

テレビドラマ「おしん」のテーマ音楽聴取に関する定性的研究

坂 田 晃 一

Qualitative Analysis of Listening of the Theme Music, TV Drama Series “OSHIN”
SAKATA Koichi

Abstract

Human life is filled with MUSIC. As a composer, I have been asking myself the question; “How can the messages of MUSIC be received by audiences or listeners?” There seems to be many factors which are concerning about this subject of discussion. In this paper I chose the theme music of the TV drama series “OSHIN” (broadcasted through NHK, Japan Broadcasting Corporation) , which I composed, as the sample, and researched listeners’ psychological reactions by semi-structured interview, in order to analyze the subject within the Method of Free Association which will never impose any restrictions on the contents of associations.

In this research I did not try to draw universal rules, but focused on the realities how the composers’ ideas or messages can be understood by listeners.

The interviewees listened to the relevant musical works with watching the footage of the title background simultaneously then I interviewed them about their images to the contents of the drama. Through the interview sessions I researched, analyzed and integrated listeners’ individual differences of reaction to the functions of the theme music.

For the research 10 interviewees are selected among the students in the dept. of Faculty of Informatica for Arts, Shobi Univ. (all are majoring Department of Music Expression). Each interviewee listened to the music with watching the video of title background footage individually then I had the interview.

Keywords: affective value, association, functions of music

〔要約〕

我々の生活の中には音楽が溢れている。音楽はひとにどのように受けとめられているのであろうか。そこには実に多くの要因が関与しているように思われる。今回、私がかつて作曲した「NHK連続テレビ小説『おしん』」のテーマ音楽を取り上げ、聴き手がそれをどのように受けとめるのかを半構成的インタビューによって調査した。半構成的インタビューという方法をとったのは、連想の内容に一切の制限を加えない「自由連想法」による分析を行うた

めである。

本稿では一般的な法則を引き出すのではなく、作曲上の意図が視聴者にどのように伝わっているのかに重点を置いている。

聴き手がテレビドラマのテーマ音楽をタイトル・バックの映像と共に聴くことにより、ドラマの内容についてどのようなイメージを持つのか、テーマ音楽の役割がどのように機能しているのか、個々の受けとめ方の違いを調査し、分析、統合した。

聴き手として、本学の学生 10 名（いずれも芸術情報学部音楽表現学科）を選び、個別にタイトル・バックの映像と共にテーマ音楽を聴かせ、その後インタビューを行った。

キーワード：感情価、連想、音楽の機能

1.1 はじめに

私は現在まで、主にドラマ等、映像のための背景音楽の曲作りに携わってきた。しかしその種の背景音楽は、流行りのポップスのように、聴き手からの直接的な反応が得られる機会は殆どない。いったん手元を離れた作品は闇の中に投げられた小石のように周囲の風景に吸収されてしまう感がある。一般の視聴者は、本当はどのように受けとめているのだろう、常々知りたくても知ることができなかった疑問である。

そこで私は今回、素材を私自身が嘗て作曲した「NHK 連続テレビ小説『おしん』」のためのテーマ音楽を取り上げ、聴き手がそれをどのように受けとめるのかを半構成的インタビューによって調査し、その結果を分析した。

しかしある音楽が、それを聴いた人にどのように受けとめられているのか、について調べることは大変な困難をとまなう。なぜなら音楽を聴取してから実際になんらかの心理的变化が起きるまで、実に多くの要因が関与しているからである。

谷口は、その要因を 4 つのカテゴリーに分類している。「第 1 に、個々人の性格、音楽的好み、聴取態度等の個人的特性である。第 2 に、音楽を聴く際の内的な心理状態とでもいうべきもので、その時の気分、悩み事の有無などである。第 3 に、生演奏か録音か、再生装置の特性、音量等、いわば音響的な環境である。そして第 4 に、音楽と同時に生起している事象、たとえば映画の画面や会話の内容との相互関係である。」⁽¹⁾

しかし、これらの多くの要因があるにもかかわらず、音楽を聴くことによる気分の変化には個人差を越えた、ある共通性があることも事実である。

これまでいくつかの研究で、被験者の音楽に対する感情反応の測定を試みたものがある。その代表的なものとしては、Hevner (1936) の形容語チェックリストがある。彼女は、67 の形容詞が似たものどうし 8 つの群にまとめられているような、円形チェックリストを作製した。さらに、Farnsworth (1954) は、Hevner の形容詞チェックリストが内的一貫性を欠いていることを指摘し、約 50 の形容詞をより一貫性のあるカテゴリーへと配置し直した。⁽²⁾

また形容語の重みを考慮するためには、単にあてはまる形容語をチェックするのではなく、尺度上での評定を行い、評定値を数値化するという方法が一般的であり、そこでは主にSD法が用いられている。

梅本は「音楽に限らず刺激がもつ情緒的意味を測定する方法としては、まず連想法をあげねばならない。なぜならば、連想は人間の高次精神活動の基礎として重要なだけでなく、ここで述べる他の測定法(SD法や形容詞リスト)での理論的根拠になっているからである。」⁽³⁾と言っている。また「連想法は再生的な課題であるが、それ以外は再認的な課題だといえるであろう。」とも言っている。

連想法は連想の内容に一切の制限を与えない「自由連想法」と、単語の長さや品詞を限定するなどの「制限連想法」があるが、そこで今回、ドラマ『おしん』のテーマ音楽を題材に、「自由連想法」による分析を行うこととした。理由として、題材となる音楽は、特定されたテレビ・ドラマのテーマ音楽として一定の状況の中で聴かれるという環境があり、テーマ音楽に引き続き始まるドラマの内容に何らかの期待感を抱くであろうこと、対象者の背景は各々大きく異なるが、本学部で学習しているという共通性があること、等の条件がそろっていることがあげられる。

今回の研究では一般的な法則を導き出すのではなく、まず聴き手がテーマ音楽をタイトル・バックの映像と共に聴くことにより『おしん』のドラマ内容についてどのようなイメージを持つのか、個々の対象者における反応の違いを探った。さらに、その音楽の作り手(作曲家)である私の作曲意図とも比較し、両者のテレビドラマ「おしん」のテーマ音楽に関する感じ方の共通点、相違点を探っていくことを試みた。また、テーマ音楽の持つ機能についても検証を試みた。

1.2 作曲意図

ここで、ドラマ『おしん』の概略と、そのテーマ音楽を作曲者である私がどのような意図をもって作曲したか、を述べておきたい。

ドラマ『おしん』の本放送は、昭和58年4月より1年間、毎朝月曜日から土曜日まで15分間放送された帯ドラマである。明治40年にその物語は始まり、大正、そして昭和の時代を貫いて80年近い歳月の上に展開され、放送時点の昭和58年に終わる。ひとりの女性の一生が3人の女性によって演じられ、長い年月を経過していくのである。子役の小林綾子による少女編、田中裕子による青春編・試練編・自立編から成り立っている。そして、乙羽信子演じるころの80歳を過ぎた現在の主人公(おしん)の回想によって、少女時代からその物語は開始される。東北の雪深い寒村の小作農家に生まれた主人公は、極貧の中にありながらも、母親や祖母の深い慈愛を感じながらその幼少時代を過ごす。しかし、その貧しさ故、父親の意思により6歳で奉公に出される。あまたの艱難辛苦をその意志の強さによって克服しつつ、様々な邂逅を経験し、生涯にわたってその恩を感じ続けるような人物とも出会い、そしてそのひきたてもあり、力強く成長していく。その後の青春、恋愛、結婚、家庭生活などにおいても、幾多の試練に打ち克ちながら自立する女性へと更なる成長を遂げる。小さな

商売を始め、幾つかの支店を持つようなスーパーマーケットへと発展を遂げ、十数店の店舗を有するまでになる。昭和 58 年、物質的に豊かになった日本社会、その中であっておしんは今や成功者である。しかし、その豊かさからは充足感を得られないおしんは、事業を次男に譲り、いわば「自分探し」の旅へひとり家を出る。数日後、おしんを慕う 1 人の孫が彼女を捜し当て、同行することになる。生まれ育った故郷の家を訪ねるが、そこにはもう誰もいない。音もなく雪が降りしきるだけだ。遠くを見るまなざしのおしん…。そして、「昔」を語り始める。

私はこのドラマのテーマ音楽を、以下に示す留意点及び意図により、作曲した。

(1)「帯ドラマ」(この「おしん」のように日曜を除く全週日、或いはウィークデー全日に放送される)の場合、放送の開始からごく初期の間に、視聴者のそのドラマについてのイメージが固定されると推測した。

(2) 回想という技法は、視聴者に「過去」或いは「昔」を意識させる。

上記 2 点により、少女時代の主人公を先ず想起させるよう、また、現代の物語ではなく「過去」或いは「昔」の物語であることをテーマ音楽によりイメージさせようとした。

(3) 哀しく、辛い、そして切ない少女期から物語が始まる。しかし、それは回想のかたちをとっている。

哀しさや辛さを回想する時、生の感情は希薄になり、切なさや懐かしさが強まると考え、メロディや和声感により、切なさや懐かしさを視聴者に感じ取ってもらえるよう曲作りした。

(4) 厳しい数々の試練を、主人公は乗り越えていく。

力強く、前進を感じさせるリズム・アレンジにより、この(4)のニュアンスを音楽的に盛り込もうとした。

(5) 雪深い寒村が主人公のふるさとであり、原点である。

冬は長く厳しいが、しかしまた、ふるさとの自然は豊かで、どこまでも高く青い空が広がる日々もあったであろう。その青い空の広がりや、乾いた大気のニュアンスなども音楽的に盛り込もうとした。

(6) 度重なる不運を克服し、前進し続けた主人公。彼女を密かに励まし、応援する音楽でもある。

(7) あらすじを思い起こさせる、そして、開演ベルの機能をもたせる。

視聴者にそれまでのあらすじや物語の進行状況を思い起こさせること、そして、曲の開始から十数秒間に亘って開演ベルに似た機能をもたせることを意図した。

これらの意図をもって曲作りを行ったわけであるが、原初の発想は抽象的な直観によっていることはいうまでもない。

このように作曲されたテーマ音楽が、本放送から 20 年を経た今、聴き手である 20 歳前後の若者達に果たしてどのように響くのか、また、私の意図したところがどの程度伝わるのか、或いは、過去の物語であることをイメージさせたとして、その時代以上の古さを感じさせてはいないか、そうした点も知りたかったことである。

2. 方法

2.1 対象者

本学部の音楽表現学科の学生 10 名を調査対象者とした。

K.M. (男性) 31 才

J.K. (男性) 24 才

M.O. (女性) 22 才

K.Y. (男性) 23 才

Y.T. (男性) 22 才

T.N. (男性) 21 才

H.T. (男性) 20 才

A.M. (女性) 20 才

S.S. (男性) 19 才

Y.I. (女性) 18 才

以上、男性 7 名、女性 3 名。年齢は社会人入学の K.M. (31 才) の他は 18 歳 ~ 24 歳。コースの内訳は、声楽コース 1 名、管弦打コース 1 名、作曲コース 7 名、音楽ビジネスコース 1 名である。

2.2 装置、材料等

リソースは、昨年 NHK ソフトウェアより販売された DVD-Video のパッケージ製品を用い、これを DVD プレイヤーからテレビ受像器に接続して再生した。このことにより、実際の放送と同等の映像及び音響的条件を用意できた。

2.3 手続き

最初に対象者に対し、調査の目的や具体的方法を説明し、さらにその内容を MD レコーダーに録音することの承諾を得ることから始めた。更に、当時の視聴者が、放送開始前の一定期間に番組宣伝によって知り得たであろう筈のこのドラマについての情報を伝えた。

そのうえで、第 1 回冒頭のタイトル部分の、テーマ音楽が演奏される部分を視聴してもらい、そこで一度再生を停止し、以下のような質問を行った。

* このドラマの再放送 (総集編を含む) を見たことがあるか。

* このテーマ音楽の感情的性質を表すとどのような言葉になるか

* テーマ音楽を聴いたことにより、このドラマがどのようなものであるか何かイメージできるか。

* (イメージできた場合) どのようなドラマであると、イメージしたか。

その後、第 1 回の残りのドラマ部分 (1 話は、テーマが演奏されるタイトル部分を含めて 15 分から成る) と第 2 回のテーマ部分、そして第 2 回から第 6 回までの重要なドラマ部分と第 7 回のテーマ部分からドラマ部分の途中まで視聴してもらった。この、テーマ部分だけ

ではなくドラマ部分をも併せて視聴してもらう理由は、テーマ音楽がドラマ本体にとってどの程度相応しいと聞き手が判断しているかを探るためである。また、複数回を視聴してもらった理由は、このドラマは所謂「帯ドラマ」であるので、日曜日を除いて連日オン・エアされ、その都度冒頭にテーマ音楽が鳴らされる、そうした状況を対象者に疑似体験してもらうためでもある。

この後、更に以下の質問を行った。

- * そのイメージとドラマの内容とが、どの程度一致していると感じたか。
- * 一度聴いた時点と繰り返し聴いた後とでは、その印象に変化や違いが生じたか。
- * 放送を毎日視聴するとして、その都度このテーマ音楽を聴くことの是非（好きか嫌い
か）
- * テーマ音楽から、特定の時代を連想するか。
- * 制作側への推測（何故このドラマにこのテーマ音楽なのか）

これらの質問を半構成的インタビューとして、対象者との質疑応答の過程で順不同に問い、臨機応変に新しい質問も追加・挿入した。

2.4 分析方法

対象者 10 名へのインタビューを MD からワープロに起こした。その中から個別の特有な点を抽出し、比較、分析を行った。

3 . 結果及び考察

学生にインタビューをした中でみられた、主たる特徴的な捉え方と、その主な例を挙げていく。

3.1 感情価

梅本は「音楽と感情について考える場合に、二つのアプローチの仕方がある。なぜある音の並びが感情を喚起するのか、長調や短調は特定の感情と結びつくのかといった、より音楽的要素を重視したアプローチと、ある音楽作品の感情的性格は聴く人にどう認知させるか、聴いた人がどのような感情を喚起されるかといった、聴く人の反応を重視したアプローチである。」⁽⁴⁾更に、「Henver (1936) は、音楽作品の感情的性質を表すものとして、感情価 (Affective value) という言葉を用いている。彼女の言う感情価とは、ある音楽作品がどのような音楽的性質をどの程度もっているのかといった、感情的性格の質と量を表すものといえる。(中略)すなわち音楽作品に対する感情反応とは、理論上は区別するべきであろう。」⁽⁵⁾と述べている。

感情価と感情反応の区別は、テレビドラマとその音楽について考える場合に役に立つ。ドラマの背景音楽は、感情反応を導き出すことをその目的とする場合が多いが、テーマ音楽は、感情価としての認識を促すことが主な目的である。そこで私は、テレビドラマ「おしん」のテーマ音楽によって、聴き手がどのような感情価を認知するのかを探ろうとし、そのための

質問を行った。それに対して、学生たちも感情価に属する言葉で答えてくれた。

「寂しさ」、「哀しげ」、「懐かしさ」、「もの悲しい」、「切ない」、「ちょっと暗い」、「かすかに明るい」、「哀愁漂う感じ」、「寂しそう」、「暗いわけではない」、「やや明るい」、「温かい」、「けなげ」、「おおらか」、「たくましい」、「強さ」などである。ここには、感情価として相反すると思える形容詞が混在している。谷口(1995)による、音楽作品の感情価測定尺度項目(p.246)⁶⁾の、高揚因子のうちのやや高揚傾向のもの(「かすかに明るい」)から抑鬱傾向のはっきりしたものまで、そして、親和因子、強さ因子に属するものがある。例えば、「ちょっと暗い」と「おおらか」「たくましい」を同一人物(K.M.)が答えている。抑鬱傾向の「ちょっと暗い」はメロディと和声感から、「おおらか」と「たくましい」は、リズム感とリズム楽器の音質から導き出されたようである。また、J.K.は

「寂しさの中にも、苦難を乗り越えていくような強さを...、なにかこう、曲に人生を感じます」と答えている。こうした「寂しさ」と「強さ」というアンビヴァレントな感情価を同時に聴き手が持つことは、私の意図したところと合致する。

3.2 印象・評価

実際の放送は約300回の長きに亙る。ドラマの進行と共に繰り返し聴くことで、また、ドラマの推移や状況設定の変化等によって、聴き手の印象や評価が変化することがあるのだろうか。

K.Y.は「最初の頃は、ドラマ(の内容)に比べて明るく感じたんですけど、ドラマが進むにつれておしんがどんな人間かということが分かってくると、納得というか、合ってるんだと思ったんですね。ああ、こういうことも考えてテーマがつけられてるんだなあ」と述べている。これは、視聴者が、主人公へ感情移入することや、ドラマの概要を知ることなどによって、テーマ音楽への印象や評価を修正することがあることを示している。また、反復聴取によって評価が正の方向へ変化を起こすことも示している。梅本の「反復聴取の効果については、長期にわたって分散して反復された場合には認知体制の分化を促進し、感情面では大きくはないが正の方向への変化を起こす」⁽⁷⁾に、符合する。

Y.I.は「今日、何回か聴いて、テーマとドラマとの内容で...最初に1回目か2回目かに聴いたときはわりと明るいのかなって思ったんですけど、その後の話のなかで少し暗いってというか、悲しい話きたときには、曲の中の暗い面が良く聴こえてきた感じが...だから、毎日聴いていくと、ちょっとずつ変わっていくと思ったので、だから、毎日同じように聴こえることはないです...多分、毎日の話によってどこかが強調して聴こえる...みたいなのがあるんじゃないかなあと」と述べている。この答えは興味深い。日々の視聴の過程で、ストーリーが置かれている状況によって視聴者の感情価が様々に変化することを示唆していると言えるだろう。梅本の「同じ人が同一作品を違う状況で聞いた場合にも異なる感情が喚起されることもある」⁽⁸⁾に相当する事例であると思われる。

聴き手の1人であるK.M.は社会人入学生で、年齢は31歳である。彼は小学生時代に実際の放送を見、テーマ音楽も繰り返し聴いている。小学生時の印象と今回改めて聞いた上での

印象を、彼は次のようにコメントしている。

「昔、テレビで聞いてたときは非常に日本的な音楽だという記憶がありました。今聴いて、そうではなくて民族音楽のような、フォルクローレのような音楽でびっくりしました」質問者「それは、あなたがその後フォルクローレの音楽を聴くことがあってそれがどういう音楽か知っているからそういうふう感じたんですね」

K.M.「そうです。今回聴いて、ドラマの内容との違和感はなく、民族音楽特有の大きさ、たくましさ、色々な社会の圧力に対してけなげに生きる力強さ、がドラマの内容とぴったり来ると思いました。」

このコメントから、聴く者の音楽経験や音楽的知識に差があることによって、対象となる音楽の感じ方が異なるのではないかと、推測できる。このテーマ音楽の一部には、いわゆる「ヨ(4)ナ(7)ヌキ」と呼ばれている短調の旋律部分がある。私が日本的なニュアンスを密かに加味することを意図したその部分を、K.M.は彼の得ていた音楽的知識(日本的な旋法を既に聞いており、ヨナヌキが日本的な音楽の特徴であると認識していた)によって日本的であると認知し、曲全体をも日本的であると判断したと推測できる。この曲にはモーダルな旋律の部分もあり、また、アンデス的なペンタトニックの部分もある。しかし、そうした部分をも含めた上での曲全体の音楽的特徴を、放送当時、小学生であったK.M.の音楽認知力では捉えることが出来なかったのであろう。また、曲の後半部分にアンデス・フォルク・ローレの楽器であるケーナを使用しているが、幼い彼には日本の笛の一種に聞こえたということである。しかし、20年を経て改めてこの曲を聴いたK.M.は、その間に得た音楽的知識によって、フォルク・ローレのような音楽と認識したわけである。

上述の内容と関連のあることであるが、年次の低い学生において、この曲が日本的ニュアンスを持つ音楽であるとする傾向があった。1年生のA.M.(20歳)とY.I.(18歳)は、明確に日本的であるとの判断を示したのである。「日本的に感じるかどうか」との問いにA.M.は「はい、日本的に聞こえます」、Y.I.は「日本的な感じがします」と答えている。

高年次の学生の中にも日本的ニュアンスを指摘する者が2名いたが、1名は部分的に日本的であるとし、1名は日本的な部分もあるがトータルには多国籍的であるとの見解を示した。他の高年次学生のうち1名は、日本的ではないが西洋的でもない、としたが、残りの学生は日本的ではないと答えた。彼らは皆、音楽専攻学生であるが、1年生の2名は音楽経験も音楽的知識も上級生たちより相対的に低いために当該楽曲を日本的であると判断したと推測される。これに対し、音楽的知識や経験が相対的に高くなる高年次の学生は概して、旋律、和声、リズム、使用楽器、編曲内容等を総合的に捉えた上で総体的な判断を下すといった、音楽認知能力の高さを見せた。このことから、梅本が「音楽認知体制の形成は音楽経験の長さや深さによって規定される」⁽⁹⁾と述べているように、音楽経験や音楽的知識の差によって、違いが生じると推論できる。また、総合的な判断力の高さと、当該楽曲への評価の高さとが、概ね一致する傾向を見せた。

3.3 連想

私は、私の作曲意図に含まれる、「視聴者に「過去」或いは「昔」を意識させる」と、「雪深い寒村が主人公のふるさとであり、原点である」の2点が、視聴者にどの程度伝わっているのかを探るための質問を行った。

まず、「視聴者に「過去」或いは「昔」を意識させる」についてであるが、

「テーマ音楽から、特定の時代を連想するか」の問いに、K.M.はその小学生時の印象を

「古い時代の主題曲という感じでした。おもに見ていたのが小林綾子さんのときだというのがありますし。自分自身にとって遠いイメージの話で、縁の遠いドラマでしたので、ほとんど時代劇のようなスタンスで聞いたり見ていたと思います」と答え、M.O.は

「決して現代ではない。現代のドラマではないですね。...よくわかんないですけど日本の古い音楽だなあっていう印象は受けました」と答えた。この2人(1人は小学生時の印象)は、ドラマの設定以上に古い時代を連想したようである。次の5人は

J.K. 「現代のイメージはありません。年代が少し古いのかと思います」

T.N. 「現代劇じゃなくて...何か少し昔の時代の話だろうかと、思いました」

A.M.. 「今のおしんと同じような、70歳くらいのおじいちゃんとかが、小さいときに暮らしていた時が思い浮かびます」

Y.I. 「曲自体が少し懐かしい感じがするので多少は現代ではなくて、少し昔なのかな? っていう感じは曲を聴いて感じます」

H.T. 「昔ですね、明治よりあとの、日本が貧しかったころって思えるんですが」

とコメントしている。彼らは、曖昧ではあるが、さほどではない過去としてある程度特定している。他に、2名は、時代を特定できないが過去を連想する、と答え、2名は、過去を感じないと答えた。私の「「過去」或いは「昔」を意識させる」という意図は、概ね伝わってはいるが、必要以上に古く感じた例や過去を全く意識しない例もあり、十全に成功したとは言えない。

次に、「雪深い寒村が主人公のふるさとであり、原点である」と、それに関連する、「視覚的な自然や風景などのニュアンスを音楽に盛り込む」とした点がどの程度聴き手に伝わるのか、について探るため、インタビュー記録から関連性のあるコメントを拾い出してみる。

J.K. 「北国から話が始まる話なのかと思います」

A.M. 「すごい、ふるさとっていうものを感じさせる曲だなあとと思います」

S.S. 「視覚的には山岳が浮かびます。それと、田舎のような、大自然のようなイメージがあります」

Y.I. 「メロディからはのどかな風景を感じます。リズムからは大きな景色ですね。全体的にはふるさとというか...そういった感じです」

これらのコメントから、私が曲に込めようとしたニュアンスが、幾ばくかは感じ取られたことが窺える。しかし、「青い空の広がり」をも盛り込もうと意図した点については、

H.T. 「雪が降ってる北国の冬を感じます。雪はもうすでに積もってるんですけど、そこに更に雪が降ってる、っていうようなイメージですね」

T.N. 「空です、少し雲がかかった夕方の空が見える感じがします」

J.K. 「真っ白い冬景色ですね」

のように、「青い空」を感じることはない聴き手もいた。

しかし「冬景色」を感じたJ.K.は「コンドル」がイメージできるとも答えた。また、「視覚的には田舎がイメージできます」と述べたY.T.は、インカの「天空都市」をも連想すると答えた。この2名は、曲の後半に使用している楽器（ケーナ）の音色によって、そうした連想を得たのである。ケーナが使用されるジャンルの音楽を聴いた経験とその記憶から、そのように想起したと思われる。このことから、私の意図した「青い空の広がりや、乾いた大気のニュアンス」を音楽的に盛り込もうとしたことが聴き手にある程度伝わったと推測される。

3.4 機能・役割

テレビドラマはそのテーマ音楽（タイトル映像部分）が、番組枠の冒頭に配置されるか、ドラマ終結後に配置されるかの、テーマ音楽呈示位置による2つのパターンに大別できる。どちらのパターンであるかによって、テーマ音楽の機能や役割は大きく異なる。この「おしん」は、典型的な前者のパターンによってテーマ音楽を呈示する。前者の重要な役割として、視聴者にそのドラマが開始したことを知らせる、いわば開演ベルの機能がある。Musselmanは「テレビの連続ものや週ごとのショーも、それらの特徴あるテーマ音楽によって、その番組ということがたやすくわかる。」⁽¹⁰⁾ことが、テレビ及び映画における音楽の機能の一つであると定義したが、この「おしん」のように番組枠の冒頭にテーマ音楽が配置される場合にのみ、この機能を果たすことが出来る（Musselmanの時代には、後者のパターンは存在しなかったと推測できる）。S.S.は

「そうですねえ何かこれから始まるんだっていう感じがします。特に、最初のイントロ的な部分とか聴くと、何かすぐわかっちゃいますね」と述べている。またA.M.は

「音楽が鳴ると、画面を見なくてもおしんが始まったっていうふうに思います」と答えている。これらのコメントはまさに、開演ベルの機能と、Musselmanの「その番組ということがたやすくわかる」機能を指し示している。私の「開演ベルの機能をもたせる」とした意図は、実際にその役割を果たしていると考えられる。

更にテーマ音楽には、「あらすじを思い起こさせる」という重要な役割があると私は考えており、この役割も前述したように私の意図したことのひとつである。次の2名のコメントは、この意図が聴き手に伝わっていることを推測させるものである。K.M. (31歳)は

「自然と頭もドラマのあらすじをなぞって今日はどうなるんだろうと、頭に切り替わるスイッチのような感じでした」とコメントし、Y.T.は

「前日の物語をその音楽を聞いて思い出すっていう感じになりますね」と述べている。

また、あらすじを思い起こさせると共に、現実からドラマの世界に視聴者の心理状態を移行させる（導く）役割を、テーマ音楽は担っていると考えられる。M.O.の

「テーマを聴くことで、このドラマの世界に入り込みますね」、そして、I.Y.の

「今日はどんな悲しいことが起こるのかなあって思ったりします」とのコメントは、この

役割を果たしていることを裏付ける。

4. むすび

谷口は「人間の心的情報処理における知的側面を認知 (cognition)、快・不快などの感情的側面を感情 (affect) とし、急激な感情の高ぶりを情動 (emotion)、感情の比較的穏やかな一時的状態を気分 (mood)」⁽¹⁾としたが、テレビドラマのテーマ音楽のような、感情的表現でもあり、象徴的表現としての機能をも有した音楽は、認知 (cognition) と感情 (affect) と気分 (mood) に対して作用している。本研究によって、これらの心的作用はある程度確認できたのではないだろうか。また、私の作曲意図が、視聴者に概ね伝わっていることも確認出来た。

昨今、帯ドラマも含めて、テレビドラマのテーマ音楽はドラマ終結後の番組最後部に置かれる場合が圧倒的に多い。しかし、帯ドラマにあっては、その役割や機能からしても番組の冒頭にテーマ音楽は配置されるべきである。本稿において示した、テーマ音楽の役割や機能等についての考察からしても、その理由は明らかである。しかし、現状においてNHKの朝ドラマ以外に、テーマ音楽を番組冒頭に置いている帯ドラマは見当たらない。テーマ音楽の役割が軽んぜられているようで、残念である。

本稿は、番組枠の冒頭にテーマ音楽が配置されるケースについてのみの研究であるが、番組終結部でテーマ音楽が演奏される場合についての研究も併せて進める必要がある。加えて、両者の比較研究も行わなければならない。両者の機能や役割の差異を明確に認識することはテレビドラマの音楽担当者にとって必須であると私は常々考えている。しかし、日本のテレビドラマにおいて、そうした認識に基づいて作られたと推測できるテーマ音楽は未だごく僅かであると私には思える。なぜなら、それぞれのケースにおいての役割を十全に果たしていると感じ取ることのできるテーマ音楽に出会うことが希だからである。

このような日本のテレビドラマの状況を打破するためにも研究を更に推し進め、テレビ界に一石を投じたいものである。

注

- (1) 谷口高志『音楽と感情』北大路書房 p.68 1998年
- (2) E.ラドシー、J.ボイル共著 徳丸吉彦、藤田英美子、北川純子
共訳『音楽行動の心理学』音楽之友社 p.182-186 1985年
- (3) 梅本堯夫『音楽心理学の研究』ナカニシヤ出版 p.226 1996年
- (4) 同、p.243
- (5) 同、p.243
- (6) 谷口高志『音楽と感情』北大路書房 p.246 1998年
- (7) 梅本堯夫『音楽心理学の研究』ナカニシヤ出版 p.250 1996年

- (8) 同、 p.242
- (9) 同、 p.38
- (10) 同、 p.230
- (11) 谷口高志 『音楽と感情』 北大路書房 p.26 1998 年

参考文献

- ダイアナ・ドイチュ 編著 寺西立年、大串健吾、宮崎謙一監訳 『音楽の心理学(上・下)』 西村書店 1987 年
- ミシェル・シオン 著 川竹英克、J. ピノン訳 『映画にとって音とはなにか』 勁草書房 1993 年